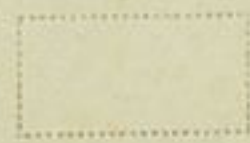


中村俊定文庫
文庫 18
177



山嵐雪十三回忌集

抜抄



萬曆三十四年集 終

悼玄崎居士三十四仙蹤

危雪在て六十歳 予はせ成

阿に入に一時の茅凡と命せし小

君中に随ひて今三十一の年

懐舊の誠を同志に頼侍り

碑の鉄とやらんに易ふる物

ならし

雷堂百里年あらふて

識

大印
100

識

享保四年己亥初冬十三日

コ
ク
ヨ



時雨けり去月乃影の十三日
 心水ぬ物を菊の跡札
 寝るゝか箴の夕押曲て
 きれてハ歌の杵にかうする
 一箇庵しと解ハ仕著物
 家の模様には並子からかさ
 涼しさハ片側に付三輪泊
 柳よりえハ首筋の砂
 く水たるの矢出菊たるをく水けせ
 孝行な小は丁と挑燈

コクヨ



時雨けり去月乃影の十三日
 心水ぬ物を菊の跡札
 寝るゝか箴の夕押曲て
 きれてハ歌の杵にかうする
 一箇庵しと解ハ仕著物
 家の模様には並子からかさ
 涼しさハ片側に付三輪泊
 柳よりえハ首筋の砂
 く水たるの矢出菊たるをく水けせ
 孝行な小は丁と挑燈



苗のはつれを拵る大根の葉	茵の	下
佛の水を碎く咏木	琴	凡
秋寒き遊女の小袖垢を足す	百	甲
窓から入るを、のかす月	夏	葉
あけ日こそ山家の食の有難き	凡	洗
棒にたる迄粘む命一毛	周	竹
勿體の咲ニワニツ花惜み	楸	下
汲せぬ鮎の神にありつけ	琴	凡
雁金ハ歸子の老の山	百	里
青蹄の朱色梅に止る	凡	洗

コッロ

三



苗のはつれを拵る大根の葉	茵の	下
佛の水を碎く咏木	琴	凡
秋寒き遊女の小袖垢を足す	百	甲
窓から入るを、のかす月	夏	葉
あけ日こそ山家の食の有難き	凡	洗
棒にたる迄粘む命一毛	周	竹
勿體の咲ニワニツ花惜み	楸	下
汲せぬ鮎の神にありつけ	琴	凡
雁金ハ歸子の老の山	百	里
青蹄の朱色梅に止る	凡	洗



うたかたの腰掛へ居る耳にすり	夏葉
新る前日の油揚の音	楸下
我心淡の釣靴の明て足せ	琴凡
玉にかゝるす笑ふ介散	百里
照後す二千里の外を居根	周竹
鞭打度に面白す露	琴凡
城取を法師返して山の色	風梳
歯の諍みに蛇た、かれ	周竹
胸の問を問の人、伸上り	楸下
かけ念佛に希子あやうす	夏葉

古碑の末の跡に上り	夏葉
歌全ハ難まの心の中	百里
風さか舞の影にほのしめ	琴凡
白鷺の歌にこりた若ふ	楸下
梅のたるとの流る水	周竹
水は月を照らす家へ花散る	風梳
急げと入るる心、こりた月	夏葉
秋葉き道木の三浦をさす	百里
梅のたると舞う花	琴凡
梅のたるとさす花、大空を舞	楸下

戸もまめむか	長持車にて	琴凡
鶯鷓返一	の音信に逢わ	凡悦
胸撫る師起の雨の鐘の聲		周竹
奉行の意忠の紋の程に		百子
壹万の草履を放つ流の花		夏葉
五味を並べ	独活の然也	楸下
荒雪十三回		
十とひいて壺も乾きぬ	冬の略	沾徳
飛雪の其角か	芝に立ん	事
おもひ其角		

戸もまめむか	長持車にて	琴凡
鶯鷓返一	の音信に逢わ	凡悦
胸撫る師起の雨の鐘の聲		周竹
奉行の意忠の紋の程に		百子
壹万の草履を放つ流の花		夏葉
五味を並べ	独活の然也	楸下
荒雪十三回		
十とひいて壺も乾きぬ	冬の略	沾徳
飛雪の其角か	芝に立ん	事
おもひ其角		

水仙	やいで	甚時	一	凡	流	桃	隣
十月	や	捨	ぬ	香	は	是	三
葉	芥	貞	佐				
掛	絡	と	て	も	誰	牛	一
散	し	下	紅	葉	白	雲	
幾	霜	の	跡	を	追	お	け
の	寺	の	道		凡	流	
年	末	の	末	葉	を	合	つ
牛	向	哉		晋	如		
た	ま	け	た	る	嵐	の	雪
の	一	む	か		八	木	
も	ス	／＼	の	本	葉	に	設
一	牛	を	か	さ	ぬ	南	盛
楓	杷	咲	り	さ	れ	は	蔭
の	池	の	影		鹿	源	片
嵐	雪	の	時	士	佐	の	末
礎	ハ						
銀	悔	な	り	し	東	朝	に
是	を						

コッ

水	仙	や	い	で	甚	時	一	凡	流	桃	隣	
十	月	や	捨	ぬ	香	は	是	三	葉	芥	貞	佐
掛	絡	と	て	も	誰	牛	一	散	し	下	紅	葉
幾	霜	の	跡	を	追	お	け	の	寺	の	道	
年	末	の	末	葉	を	合	つ	牛	向	哉	晋	如
た	ま	け	た	る	嵐	の	雪	の	一	む	か	
も	ス	／＼	の	本	葉	に	設	一	牛	を	か	さ
一	牛	を	か	さ	ぬ	南	盛					
楓	杷	咲	り	さ	れ	は	蔭	の	池	の	影	
嵐	雪	の	時	士	佐	の	末	礎	ハ			
銀	悔	な	り	し	東	朝	に	是	を			

聖一予にハカの一破と
 印石の片面を印了す
 門人のしるし今に法華寫
 經の便々と存れり
 ともしくれせを太秦の破す

廣
 岸
 江

筆海... 東阿... 是
 巧如... 師... 筆... 阿...
 極... 妙... 師... 阿... 妙...
 人... 筆... 師... 阿... 妙...
 十... 月... 師... 阿... 妙...
 十... 月... 師... 阿... 妙...
 十... 月... 師... 阿... 妙...
 十... 月... 師... 阿... 妙...
 十... 月... 師... 阿... 妙...

[]

[]

其門に膝をなすしも
九人のなすし予ハ七師に
相年のあもいいくはくそや
菩提元老の餘慶や液の雨
炭とりた~~た~~く殻の曉
川を~~遊~~汐を蹴立る静庵して
藏に用る穴に記も存
月夕掃子^草臍を盛こほし
池に委しき野郎一人
精造の草の花皆古傍非車

百里 園竹
百里 序令
百里 琴凡
百里 果

コッ

其門に膝をなすしも
九人のなすし予ハ七師に
相年のあもいいくはくそや
菩提元老の餘慶や液の雨
炭とりた~~た~~く殻の曉
川を~~遊~~汐を蹴立る静庵して
藏に用る穴に記も存
月夕掃子^草臍を盛こほし
池に委しき野郎一人
精造の草の花皆古傍非車

神送るらん凡そ敷に捧	序令
猿買を知らぬ柿にふらさめり	貞佐
剣さすすはは宗の合 <small>點</small>	琴凡
<small>是</small> 輕となつ三身の <small>是</small> 農あて	百甲
鯉鮒の子の早サ <small>同</small> あり	流洲
拂物末ぬ日の機嫌とりにくし	琴凡
伝子吹日茶懐交り	用竹
傘の白ふに花のむかしあり	序令
瓦にすみれ庭の幸	貞佐
雨子たかひに郎もとふらふ	

三三三

月影に大空の雲をわたる	田井
北の川をわたる水に	裕英
いづれは日影のすゝめ	大と
風上は流るる	魚
朝風は吹く	あ
井に流るる	水
人跡のあふ	路
路の末は	あ
江の流るる	水
雨は	あ

五月十日
 六月十日
 七月十日
 八月十日
 九月十日
 十月十日
 十一月十日
 十二月十日

事實そのまゝ、十三周

培 小 也 袴 十 徳 枯 路 原
 沼 洲

年 幸 々 に 江 江 に 顔 存 後 者 付
 琴 尾

年 と 月 夾 の 夾 又 廻 る 其 影 が
 序 令

一 葉 散 香 色 採 甘 や 冬 木 之
 咸 宇

川 音 の 隔 の 柳 也 枯 柳
 只 尺

中書

散紅葉塚の押形残り	於山
鐘谷に入霜の縁草	百里
神衣する物を一日遣捨て	周竹
いまた膾に存るぬ夕月	旅山
紙合羽短くすくむ秋の風	百里
繁華の銭と送りの音	周竹

散紅葉塚の押形残り	於山
鐘谷に入霜の縁草	百里
神衣する物を一日遣捨て	周竹
いまた膾に存るぬ夕月	旅山
紙合羽短くすくむ秋の風	百里
繁華の銭と送りの音	周竹

樂能辨也 變方水 〇 升 〇 叫 〇

笈 〇 出 〇 當 〇 入 〇 仕 〇 入 〇 均 〇 第 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇

等 〇

〇 〇

授 〇

匹 〇

〇 〇

〇 〇

〇 〇

〇 〇

〇 〇

